

日本細菌学会 関東支部ニュース

第36号

第83回日本細菌学会関東支部総会のご案内

ご案内のように第83回日本細菌学会関東支部総会を下記の通り、開催する予定です。

会期：平成12年11月20日
(月)、21日(火)

会場：国立感染症研究所
および国立国際医療センター講堂

プログラム

1. 特別講演(20日)

「Research on Microbial Virulence: Yesterday, Today and Tomorrow」
(Dr. John Mekalanos, Harvard Medical School)

2. 教育講演(21日)

「病原菌認識に関わるToll-like receptors」
(審良静男先生、大阪大学微生物病研究所)

「感染症の情報収集とその利用」(岡部信彦先生、国立感染症情報センター)

種々の微生物およびヒトのゲノムの全一次配列がほぼ分かってきたことにより、目的とするあるいは関連性がある遺伝子およびその遺伝子産物を直接的な標的とした解析方法を取ることができるようになってきました。細菌の自然界における生態あるいは細菌と宿主動物並びに植物との共生、寄生、侵襲等の分子機構を解析し、その結果を人類のために応用する技術面の飛躍的な進歩により、細菌学の研究も新しい局面を迎えているといえます。特に感染症の分野においては、昨今、新興・

国立感染症研究所・細菌部 渡辺 治雄

(写真 後列中央)



再興感染症の隆盛により、社会的側面においても注目度が増してきています。本学会においては、細菌感染症を、菌側の病原性、宿主側の防御反応、および社会的側面から考えてみることを主旨として、3題の講演を柱に据えてみました。菌の病原性の分子的解析の歴史的背景およびゲノム解析後の今後を見据えての研究のあり方について、コレラ研究の世界の先導的立場にあるMekalanos教授に講演をいただきます。感染を考える場合に宿主反応を抜きには語れません。近年、微生物感染に対してのinnate immunityにおいて、Toll-like receptor familyの役割の重要性が指摘されてきています。この分野の第一人者であります審良静男教授に、Toll-like receptor family研究の現状および感染症研究における位置づけについて語っていただきます。感

感染症の研究は社会に役立って始めてその効果が見えてきます。1999年より「感染症新法」が施行されて1年が経過し、我が国における感染症の現状がより科学的に把握されようとしてきています。感染症の情報収集とその利用のあり方に関し、岡部信彦感染症情報センター長にまとめていただきます。これらの講演を軸に、本学会会員の先生方の研究発表をセクション毎にまとめ、活発なる討論および

実のある情報交換ができるように企画したいと考えております。是非、学会員の皆様には、多くの演題を発表していただきますよう、ご協力お願いいたします。

(ホームページ ; <http://www.nih.go.jp/niid/bac/gakkai/kanto83.html>、事務局 感染研細菌部 ; Tel/Fax: 03-5285-1111/03-5285-1163、E-mail: vibriots@nih.go.jp)

第84回日本細菌学会関東支部総会のお知らせ (1回目)

横浜市立大学医学部細菌学 奥田 研爾

私はこの度第84回日本細菌学会関東支部総会を開催させて頂くことになりました。本学会の伝統を汚す事の無いよう頑張る所存です。今回は神奈川県民ホールにて2001年11月26日(月)、27日(火)の2日間にわたり行います。

まず、特別講演として、スウェーデン、カロリンスカ研究所のBritta Wahren教授による、「DNAワクチンを使用した感染防御について(仮題)」、というタイトルで講演をして頂く予定にしております。Wahren教授は、カロリンスカ研究所でHIV-1、C型肝炎、その他種々の微生物のワクチンなどの研究を行っており、我々と臨床研究の共同研究も行ないつつあります。今日、動物実験により有効性の確認されつつあるDNAプラスミドのいくつかの臨床実験結果などを含めていくつか話をして頂くことになっています。更にCpGモチーフを含めた検討をシンポジウムの「DNAワクチン」で浜松医科大学の小出幸夫教授と共にdiscussしていただき、DNAワクチンの将来の問題点、長所等を検討していければと思っております。その他、もう1人外国からお呼びするかどうかも検討中です。

次に、シンポジウムを今のところ3つ、企画しております。1つ目は前述したDNAワクチンで、小出教授と私とでプランニングをしております。ワクチンは、今まで生菌及び死菌vaccine、component vaccineなどが報告されておりました。しかし、1990年代よりDNAワクチンは、細胞障害性T細胞の活性化を著明にすることが分かり、細胞内寄生性

細菌、あるいはウイルス、ガンなどに有効であろうと想定され、盛んに各国で研究されております。そこで、第一線で活躍されている先生を海外より1人又は2人お呼びしてお話しして頂き、その将来性についてじっくり検討したいと思っております。さらに山本三郎先生、徳永徹先生など予研の先生方が、細菌のDNA(CpGモチーフを含む)が免疫反応を増強させるということを最初に発見なさった訳ですが、この日本の誇るべき発見等を紹介して頂きたいと思っております。

2つ目は、千葉大学医学部の野田公俊教授と同薬学部の山本友子教授にお願いし、「細菌の病原因子のコントロール」のお話をして頂こうと思っております。細菌学は、分子生物学の手法が多く取り入れられており、病原因子の分子遺伝学的最新の知見がトピックとして紹介されるものと思います。

3つ目は、名古屋大学太田美智雄教授が主となり、抗生物質の無制限な使用と環境破壊についてシンポジウムを行なって頂こうと思っております。抗生物質の乱用による環境破壊については、現在大きな社会問題であり、日本細菌学会でも率先してこのような状況に警告を与えなければならないと思います。そこで太田教授がその方面のことを色々検討なさっておられるので、農林水産省や医学方面以外の方々にも出来るだけ多く参加・発表して頂き、家畜類の飼料に抗生物質が手軽に使用されていたり、魚類の餌に大量混入されたりすることが、新しい耐性菌の出現を誘発してい

る点などに関するお話をさせて頂くつもりです。いずれもまだ仮案の段階で、正式な人選・内容等は各先生方に御任せしております。会場は収容人数がそれぞれ450人と250人の2つの会場を使い、1つの会場では教育講演・シンポジウムなどを行ない、もう一方の会場では一般講演を行なう予定であります。

会場周辺は、横浜の名所が最も多くある所

で、山下公園、ベイブリッジ、ランドマークタワーが間近に見え、横浜観光の一大スポットとなっております。港横浜の魅力も満喫していただけるロケーションと思います。また、徒歩すぐのところには中華街もあり、懇親会もそちらか、県民ホールの展望レストランを検討しております。関係各位、できる限り多くの先生方の御参加を心よりお待ちしております。次第です。

平成10年～12年期日本細菌学会関東支部長の終了と 次期（平成13年～15年期）支部長再任のご挨拶

東京女子医科大学微生物学免疫学教室 内山竹彦

平成9年10月～平成12年9月期の日本細菌学会関東支部長の任務が終わりました。しかし、平成12年10月～平成15年9月期の関東支部長を前期に引き続きお引き受けすることになりました。

前期の支部会では支部長として至らぬこともあり、会員の皆さまにはご迷惑をかけたところもありましたが、多くの関東支部会員と評議員の諸先生のご協力により、変革の関東支部会となりました。年2回開催されていた関東支部総会は今年より秋の一回に統一されることになりました。これまでは、春と秋の支部総会では演題数が足りずに、支部総会長が支部会員に個々に出題を依頼する状態が続いていました。評議員会は時間をかけて論議しました。統一化の利点と欠点については関東支部ニュース32号（平成10年9月）と33号（平成11年5月）をお読みください。支部ニュース32号において、統一化案を広報し、全会員に葉書でご意見をお聞きしました。発送数1,521通、有効回答は409通、統一化賛成は398通でした。そして、平成10年11月の80回関東支部総会での関東支部会務総会において満場一致で可決されました。今年秋の第83回関東支部総会から年一回の関東支部総会となります。

「やっとなれる。統一された関東支部総会の推移や、ひとつ前の支部会（吉川昌之介支部長）から始まった関東支部と感染症学会東日本地方会、化療学会東日本支部会との合同学会の将来等については一歩身を引いて観察しよう。」と思いつつ、今年7月の関東

支部評議員会で支部長選考に入りました。予期せぬことに、わたくしを再度支部長への推薦がありました。統一化された関東支部総会の推移は、わたくしも積極的に見守る義務があります。3学会合同学会は、第76回関東支部総会（平成8年、総会長 内山）時の第一回目の合同シンポジウム以来、数回の合同学会を経験しましたが、合同学会は、母体の3学会にきちっと定着していないように思えます。それゆえに、この合同学会の推移もわたくしは避けて通ることは出来ません。以上の理由から推薦を辞退せずに、新評議員の選挙による判断を受けました。その結果、支部長に再選されました。



日本細菌学会関東支部は日本細菌学会全会員の約半分を占め、大いなる活躍が期待されております。感染症の重要性が見直され、細菌学研究の手法も飛躍的に発展を続けています。関東支部は、支部総会本体や他の学会との連携した学会、シンポジウムの開催等を通じてさらに飛躍して行かねばなりません。前期の評議員と同様に次期の評議員はみな活力のある方々です。それゆえに、微力ですが、再度支部長として努力する所存であります。

これまでのご協力、ご援助を有り難うございました。次期支部会においてもよろしくお願いたします。

フォーラム

今回のフォーラムではSTDを取り上げました。最近マスコミを賑わしているテーマではあるのですが、日本細菌学会（関東支部会）での取り扱いはずいぶん大きくはなかったようです。編集委員会ではこのギャップを埋めるべく、専門の先生方に執筆を依頼しました。

クラミジアの陰にエイズあり

—そのクラミジアは

今や性生活の生活環境汚染—
性の健康医学財団会頭 熊本悦明

本邦の感染症研究者の間には、いまだにエイズ/HIV感染研究とSTD研究とは別なテーマと信じている方々が少なくない。全く困ったものであると思っている。

確かにエイズ/HIV感染・B型肝炎・性器ヘルペス・尖形コンジローム・性器クラミジア感染症・淋菌感染症など、それぞれ独立した研究対象ではあるが、今やそれらが性行為による感染が主であり、すべてを含めてSexually Transmitted Infection (STI) と呼ばれている。

ところで、ある地域の性生活環境が、各種の性感染症の病原微生物により著しく汚染されれば、その地域の人々はそれらのSTDに誰が罹っても不思議でない状態にあると考え

ている。丁度通常の生活環境管理の悪い低開発国では、食料・飲料からの腸管感染症発症の危険性がかなり高いのと同じことである。その低開発国では、それぞれの腸管感染症の研究のみでなく、総合的な腸管感染症予防対策として全腸管感染症の疫学調査や環境汚染度の調査を行い、そのdataに基づいて感染予防対策が立てられている。特にその中でも最も流行し、またチェックし易い腸管感染症の管理に特に力を入れ、その成果を基盤に全腸管感染症対策を行っているのが国際的通念といってよい。

同様なことが性感染症についてもいえる。しかも本邦における一般市民の性生活環境の中には、問題の性感染の流行度は著しく、今やまさに“生活環境汚染的情况”にあるのである。この本邦におけるSTD流行度の現状の詳細は紙面の都合で充分紹介できないが、参考のため2、3のdataを紹介しておきたい（参照：熊本ほか、日本性感染症学会誌、

図1 本邦における10万人当りの性別STD推定年間罹患数の推移
(性器クラミジア/性器ヘルペス)

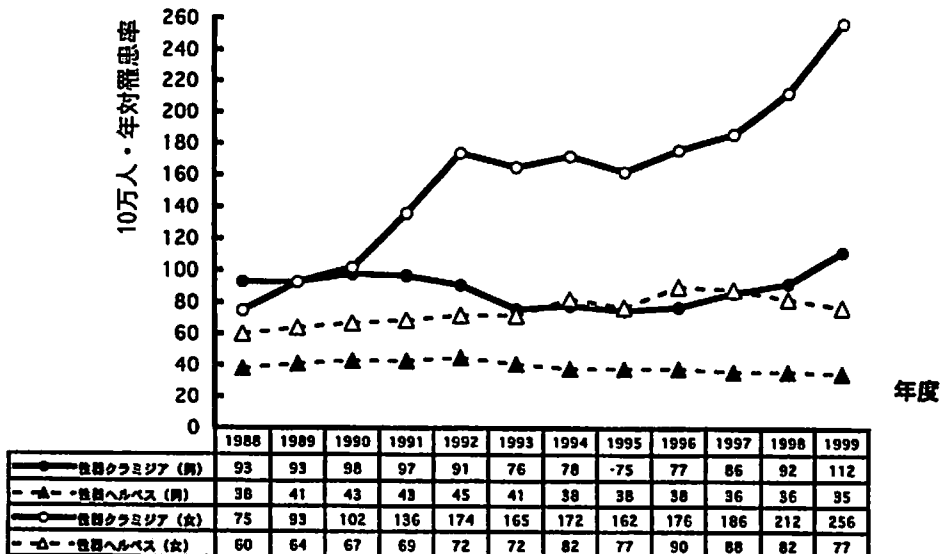


図2 本邦における10万人当りの性別 STD 推定年間罹患数の推移
(淋病様疾患/尖圭コンジローム)

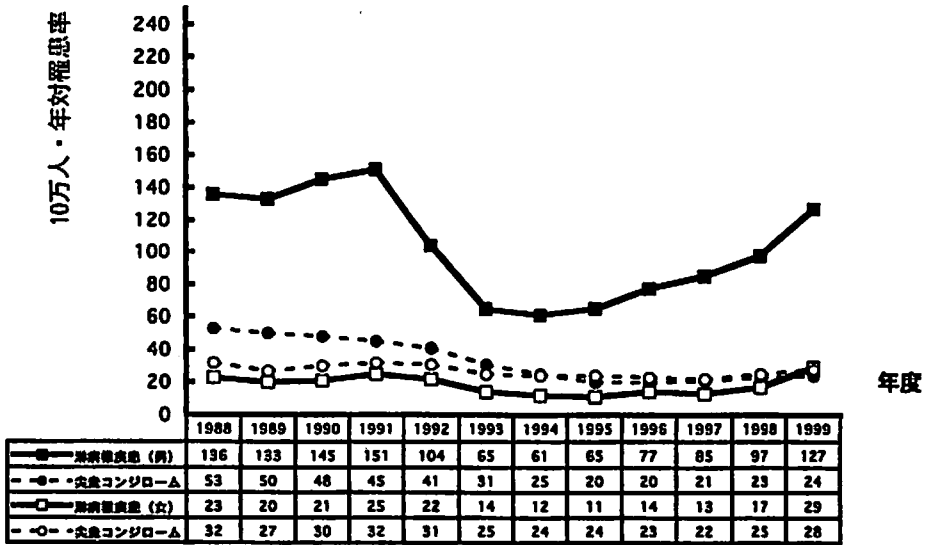
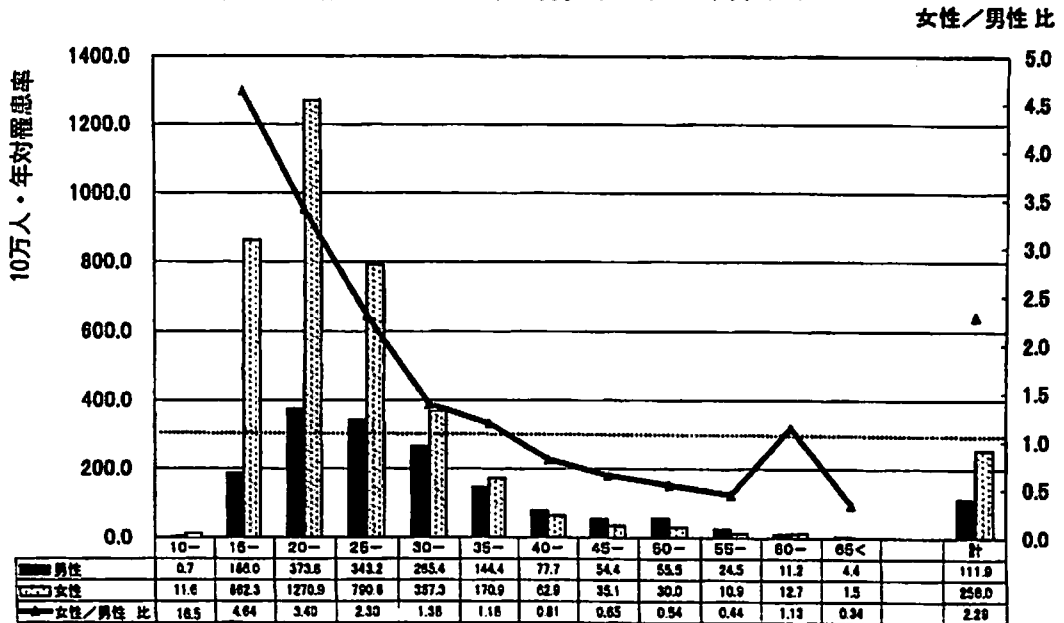


図3 性器クラミジア感染症疫学調査 (1999年度調査)

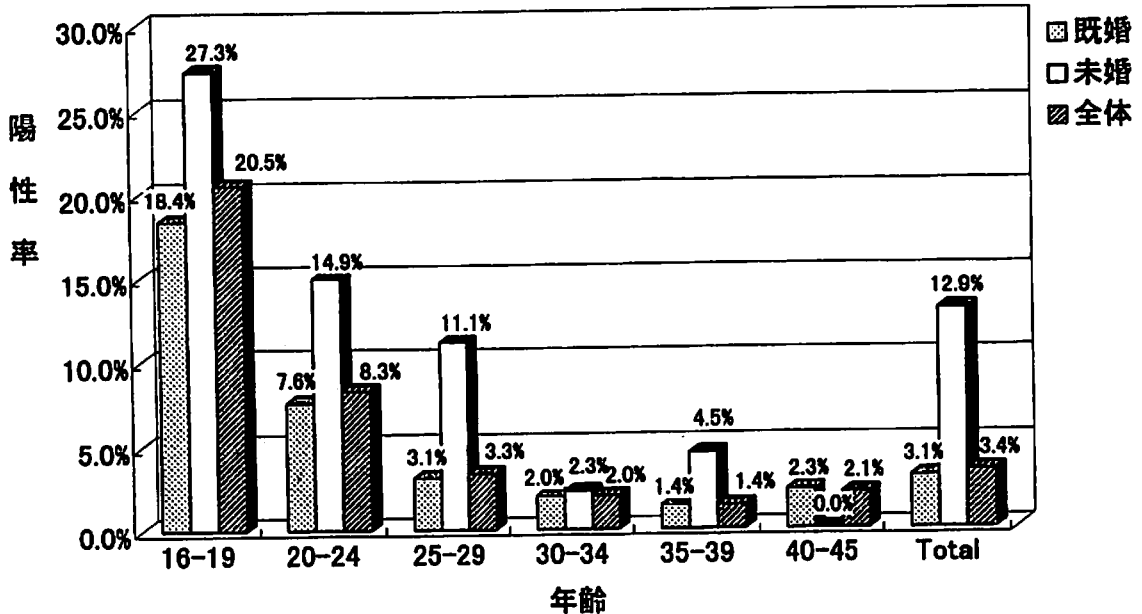


11; 72-103, 2000)。図1、2は、厚生省・国立感染症研究情報センターによるSTD動向調査を我々のSTD疫学研究班の調査成績を基に修正したものである。淋菌およびクラミジア感染が、ここ数年急増傾向にあることがわかる。この様にSTDが急増している医

療先進国は本邦のみであると言ってよい。これは“エイズ/HIV感染予防はSTD予防より始めよ”という国際通念に全く反する状況にあるといえよう。

ことに図3に性器クラミジア感染の疫学調査dataを示したが、20~24及び25~29才女

図4 妊婦のクラミジア陽性率（全例検査施行施設19,002例）



性で、有症状例が10万人・年対罹患率でそれぞれ1.3%及び0.8%となっている。ところが、クラミジアは4/5は無症候とされているので、無症候感染も含めると、その5倍の6.5%及び4.0%は感染症例がいることになる。事実、一般女性の代表と考えられる既婚の妊婦の検査で、クラミジア陽性率は同年齢で7.6%及び3.1%という別の全国産婦人科教室での調査成績(図4)があり、その推計の正しさが証明されている。このdataを基に、本邦の生殖年齢男女間における性器クラミジア感染症例総数を推定すると、約97万人にもなる。他の性感染症も考慮に入れると本邦における性感染症罹患例は膨大なものになる。

しかもこの様な性感染症罹患例はHIV感染に3倍も4倍も感染し易いことは周知の事実であり、本邦における性感染症による性生活上の生活環境的汚染は重大問題を抱えている訳であり、極めて深刻な問題点といえる。

以上のことからHIV感染の予防のためには、STD、ことに現在最も大流行している性器クラミジア感染症の疫学及び予防研究こそ、最重点研究項目として取り組むべき時になっていると言つてよい。まさに今やHIV/STD時代なのである。

臨床現場におけるSTD

済生会川口総合病院・泌尿器科 奥村俊子

STDは性交または類似の性行為による感染症であるが、患者は疾患により、泌尿器科、皮膚科、婦人科、内科、性病科などを受診しており全体の把握はなかなか困難なのが現状である。STD全体の実態調査は各県のSTD定点サーベイランスの報告を厚生省がまとめているが、定点の偏りもあり、各地で、泌尿器科医を中心としたSTD研究会が発足し、現状の把握に努めている。

STDは1992年のAIDS撲滅キャンペーン後、急激に減少してきていると言われていた一方、女子高校生など素人の若い女性の間で、急速に増加しているとも言われている。

埼玉泌尿器科STD研究会では1989年から実態調査を始めたが、92年には明らかな減少傾向が認められ、1施設1年あたり89年の60例を最高に93年は31例で89年の52%に減少した。しかしながら、98年には48例(80%)まで再増加してきている。

1998年の統計では、県内23施設が登録した結果、総数1,133例で、泌尿器科主体の調査なので98%が男性であるが、20歳代46%、30

歳代30%、40歳代10%、10歳代7%となっている。女性では、男性に比べて10歳代の割合が多く、20%である。

疾患別では、淋菌性尿道炎29%、クラミジア性尿道炎22%、非淋菌性・非クラミジア性尿道炎38%であり、巷で言われているほどにはクラミジア性尿道炎の数は多くない。その他には、陰部ヘルペス4%、尖圭コンジローマ3%などがあげられるが、梅毒、エイズなどは1%未満である。

感染源としては、淋菌性では、CSW (commercial sex workers)が3分の2を占めており、特にファッションマッサージでの感染がそのなかの58%に達している。ソープランドでの感染が減少したのに比し(94年13%が98年7%)、ファッションマッサージでの感染は94年2%が98年22%へと急激に増加している。更にこれらの85%は、oral sexに起因すると考えられる。

一方、クラミジア性ではCSWは25%で、行きずりを含む異性の友人が43%であり、いわゆるプロではなく、素人の中で着実に増加している事が伺われる。

使用薬剤は、80~85%がキノロン系であり、(ペニシリン系の使用はほぼ0)、有効率はクラミジア性がやや悪く95%、その他は97~98%であり耐性菌は現在のところあまり問題にはなっていない。

日常の診療の中では、感受性試験上は無効でも、臨床的にはほとんど有効であり、耐性菌に苦慮する症例は、現在のところ経験していない。淋菌性ではキノロン系7日間投与、クラミジア性ではキノロン系またはテトラサイクリン系14日間投与で充分と考えている。

今後、素人の若い女性でのクラミジア感染症の増加、ファッションマッサージでのoral sexによる感染が課題になると考えられる。

新たな社会病—C. trachomatis感染症

国立感染症研究所・ウイルス第一部

リケッチャ・クラミジア室 岸本寿男

トラコーマクラミジア (*Chlamydia tra-*

chomatis: *C. trachomatis*) は、わが国でもかつてトラコーマの病原体として猛威をふるった時代があり1920代頃までは国民病といわれたほどであったが、現在ではそのような古典的トラコーマをみることはまず無い。しかし一部の開発国ではトラコーマはいまだに重大な眼感染症であり5,000万人近い患者が失明の危機にあると言われている。

一方先進国ではトラコーマを起こす血清型とは異なる*C. trachomatis*が、淋病よりも頻度が高い性感染症の主要な病原体として問題となっている。その感染様式は、性行為による接触感染である。症状に乏しいことが多いため見過ごされやすい。男性では尿道炎、精巣上体炎、前立腺炎を引き起こし、女性では子宮頸管炎から上行性に付属器炎を併発する。さらに激しい呼吸性の右上腹部痛を伴う肝周囲炎 (Fitz-Hugh-Curtis 症候群) や、卵管狭窄や癒着を来し不妊や子宮外妊娠の原因となる。オーラルセックスによる咽頭への感染の報告もある。また産道感染により新生児肺炎、封入体結膜炎などを起こすこともよく知られるようになった。

わが国での実態はというと、まず感染症状を訴えて婦人科や泌尿器科を受診した患者のクラミジア陽性率は25~40%にのぼるとされる。人工妊娠中絶を希望した10~30代の未婚女性で約15%、10代では24%という想像以上の蔓延が指摘されている。既婚の正常妊婦でさえ、その子宮頸管における抗原保有率が6%に上り、男性の保菌率も同等と指摘されている。この実態はごく普通の一般家庭に本感染症が入り込んでいることを意味しており、まさに新たな社会病といっても過言ではない。

しかしこれほど蔓延し、憂慮すべき状態であっても、*C. trachomatis*感染症に対する一般の認識はどうかというと、残念ながらはなはだ乏しいと言わざるを得ない。社会人や学生に対する意識調査では、*C. trachomatis*感染症に対する知識がほとんどなかったり、知ってはいてもHIVと違って抗菌薬ですぐ治るからなどと軽視していたり、きわめて認識が低いという結果が得られている。さらに*C. trachomatis*感染をしているとHIVの感

染効率が非常に高まるとの報告もあり、一旦これらの*C. trachomatis*感染症の蔓延しているグループに HIV が入り込んだ場合、HIV 感染の爆発的流行に結びつく可能性もないとは言いきれない。ビル解禁による影響も含め今後慎重に監視していく必要がある。しかし、最も重要なことは*C. trachomatis*感染についてのなお一層の認識向上をめざすことであろう。特に感染した場合、将来への影響が大きい10代の子供たちにあらゆる機会をとらえて本症に対する教育、啓発をしていくことが肝要と考える。

細菌感染防御のための糖鎖ワクチン開発

鳥取大学・農学部応用生命科学講座

生物化学研究室 山崎良平

病原性グラム陰性菌のうち、性的感染症 (STD) を引き起こすりん菌 (*Neisseria gonorrhoeae*) を例にして、糖鎖を利用したワクチン研究開発の背景とその現状を紹介する。

りん菌は、同じ属の髄膜炎菌 (*N. meningitidis*) から派生したと考えられており、ヒトの生殖器に最も適合するように進化した細菌である。りん病は、未だに主要な性的感染症 (STD) の一つであり、1998年の報告によると、全世界で年間6,500万の人間がりん病に感染するとされている。近年、抗生物質耐性菌株の出現により、治療が困難なケースも増加してきており、また、りん病患者はクラミジアにも感染している率も高く、これらのSTDに罹病している場合、HIVにも感染しやすいことが知られている。

感染症研究が最も進んでいるアメリカでは、細菌の引き起こすSTDに対するワクチンによる感染防御は、公衆衛生という観点からも重要な課題として取り組まれている。更に、多くの兵士を感染から守るにはワクチンが最善であるという国防上の観点も、開発研究の原動力である。

初期のりん菌に対するワクチン開発は、細胞外膜上の免疫原性を持つ抗原、接着因子で

ある繊毛、そして、タンパクを中心に研究が進められてきた。しかし、繊毛やタンパクワクチンの投与では感染を防ぐことができなかったことから、糖質抗原であるリポオリゴ糖 (LOS) が、ワクチンの候補として浮上し開発研究が進められてきている。

りん菌の産生するリポオリゴ糖 (LOS) は、オリゴ糖がLipid Aと結合した免疫原性を有する糖脂質である。過去10年の研究により、オリゴ糖の構造が、LOSの抗原性を決定し、また、その糖鎖の部分構造は、ヒトの糖脂質に発現する糖鎖と同一であることが明らかとされた。解明された糖鎖構造は、LOSの免疫生物学的な役割の解明という更なる研究課題を提供した。と同時に、ヒトの糖脂質の抗原性模倣から予想される免疫耐性の問題解決という、ワクチン開発における大きな課題を与えた。

しかしながら、この数年の研究により、「りん菌のLOSにだけ存在し、ヒト細胞組織には存在せず、且つ免疫原性を持つ部位」の同定がなされ、免疫耐性の問題解決の糸口を見出した現状にある。このようなLOSに特有なエピトープの分子生物学的、あるいは合成化学的手段による構築が、感染予防のための糖鎖ワクチン開発のために行われている。

りん菌に対するLOSワクチン開発研究に至る道筋、並びに、その現況を急ぎ足で述べてきたが、このような研究は、ヒトを宿主とする他の細菌感染防御のためのワクチン開発にも大いに寄与するものである。

ワクチン開発の基礎研究は、分野の異なる研究者達の共同研究、それを可能にする組織的且つ社会的環境の整備、更に、そのような研究を企画・支持する科学者出身のadministrator集団の存在、により実現するものである。日本でも、異分野の研究者がクロスオーバーして共同研究を行える環境とシステムづくりが必要であると思われる。

研究所紹介

微生物系統保存の重要性とJapan Collection of Microorganisms

理化学研究所・微生物系統保存施設 辨野 義己

バイオテクノロジーの適用範囲の拡がり、新たなバイオ産業の創出には新規の微生物(遺伝子)資源の確保が不可欠である。このような微生物資源確保に当たっては微生物(遺伝子)の系統的な収集・保存体制の整備が緊急な課題となっている。微生物の保存は系統を保存するので微生物系統保存といい、これを担当する機関を微生物系統保存機関というが、一般的にはカルチャーコレクション(Culture Collection)という言葉を使うことが多い。我が国の微生物学の研究は欧米に比べて比較的早い時期に開始されたが、研究の基盤を支える菌株の保存事業においては立ち遅れていた。1944年に設立された現在の財団法人発酵研究所(IFO)は民間機関としての制約があるなかで大きな成果をあげてきた。しかし、国として、微生物の系統保存が論議されるようになったのは1980年代になってからである。微生物を保存している機関は決して少なくなく、大学関係だけでも100近いコレクションがあり、各省庁や民間の研究所を加えればその数は相当多いと思われるが、十分に機能している機関は少なく、活発に機能している機関の多くは日本微生物資源学会の機関会員(現在23機関)となっている。

微生物系統保存事業の基本的な業務は言うまでもなく、微生物株を収集し、その持っている形質を変えずに保存し、それを必要とする研究者や機関に供給することにある。しかし、要求される業務は時代とともに変化し、多様化している。さらに微生物の各種情報についても提供しなければならない。我が国のカルチャーコレクションもこの流れのなかにあるが、基本は厳守しつつも研究者のニーズに応じていく業務内容を変えていかねばならない。

微生物系統保存機関は収集保存された微生物は研究や産業上の目的のためにそれを必要

とする研究者や企業などに分譲し、資源の有効利用を図ることが大切である。しかしながら、菌株は誰にでも分譲できるものではなく、微生物を正しく取り扱うことのできる技術と知識を持ち、必要な設備を備えている機関に限定される。また、植物防疫法や家畜伝染病予防法により、分譲が制限される微生物もある。

理化学研究所・微生物系統保存施設(Japan Collection of Microorganisms)は我が国のライフサイエンスの研究推進を図るための研究基盤として、1980年に設立された。その目的は先に述べた内容を行うために、細菌、放線菌、古細菌、酵母およびカビの系統保存を行い、それらの分類学、同定法、保存法の研究も行っている。現在、約10,000株を保有し、約6,000株が分譲対象になっている。当施設では3年毎にカタログを出版し、新規分譲株の情報は毎年発行するニュースレターで得ることができる。さらに、JCMのホームページ(<http://www.jcm.riken.go.jp>)からも最新の情報を閲覧することができる。1菌株あたりの分譲費用は8,000円(公的機関の場合、半額)ほどである。さらに、新属・新種を命名提案される場合、微生物系統保存施設の2機関以上に寄託することが義務づけられており、研究論文を投稿される前に、微生物株を寄託されることをお薦めいたします。

微生物資源の確保を各国が精力的に実施している昨今、我が国でも分散している微生物資源の収集・保存を総合的に行う中核的機関の創設が望まれており、大きな変化が生まれつつある。

集 会 案 内

○第34回腸炎ビブリオシンポジウム（発見50周年記念大会）

会 期：平成12年10月13日（金）～14日（土）

場 所：全日空ゲートタワーホテル大阪（大阪府泉佐野市りんくう往来北1番）

世 話 人：本田武司 大阪大学・微生物病研究所

問合せ先：第34回腸炎ビブリオシンポジウム事務局 堀まゆみ

Tel 06-6879-8276、Fax 06-6879-8277、

E-mail: hmayumi@biken.osaka-u.ac.jp

○免疫抗体・血清療法発見110周年記念シンポジウム

会 期：平成12年11月9日（木）13:00～17:50

場 所：北里本館・北里ホール（東京都港区白金5-9-1）

問合せ先：北里研究所・基礎研究所、研究業務調整室

Tel 03-5791-6119、Fax 03-5791-6120、

E-mail: koutai@kitasato.or.jp

○第6回日本エンドトキシン研究会

会 期：平成12年11月23日（木）～24日（金）

場 所：栃木県総合文化センター（栃木県宇都宮市本町1-8）

世 話 人：窪田達也 自治医科大学・集中治療部

問合せ先：第6回日本エンドトキシン研究会事務局 長沢雅江

Tel 0285-58-7392、Fax 0285-44-8845

E-mail: nagasawa@jichi.ac.jp

○第35回緑膿菌感染症研究会

会 期：平成13年1月26日（金）～27日（土）

場 所：横浜市健康福祉総合センター（横浜市中区桜木町1-1）

会 長：小田切繁樹 神奈川県立循環器呼吸器病センター呼吸器科

問合せ先：第35回緑膿菌感染症研究会事務局 綿貫祐司

Tel 045-701-9581、Fax 045-786-4770

○第16回日本環境感染学会総会

会 期：平成13年 2月23日（金）～24日（土）

会 場：東京ドームホテル（東京都文京区後楽 1 - 3 - 61）

会 長：柴 孝也 東京慈恵医科大学内科学講座第 2

問合せ先：第16回日本環境感染学会総会事務局

吉田正樹、吉川晃司、Tel 03-3433-1111（内線3221）、Fax 03-3433-4297

E-mail: j-kouken@yg7.so-net.ne.jp、

ホームページ <http://www.congre.co.jp./ic21>

○第31回日本嫌気性菌感染症研究会

会 期：平成13年 3月 3日（土）

場 所：有壬記念館（新潟大学医学部学生会）

会 長：大石正夫 白根健生病院・眼科

問合せ先：新潟大学医学部眼科学教室内事務局

Tel 025-227-2296、Fax 025-227-0785

○第14回臨床微生物迅速診断研究会総会

会 期：平成13年 6月24日（日） 9：00～17：00

場 所：福岡県中小企業振興センター（福岡県博多区吉塚本町 9 番15号）

会 長：山根誠久 琉球大学医学部臨床検査医学講座

問合せ先：仲宗根 勇 〒903-0125沖縄県中頭郡西原町上原207

琉球大学医学部附属病院検査部

Tel 098-895-3331、Fax 098-895-1463、

E-mail: isamu@med.u-ryukyu.ac.jp

○第15回Bacterial Adherence研究会

会 期：平成13年 7月14日（土）

場 所：オークラホテル新潟（〒951-8053 新潟市川端町 6 丁目53番地）

会 長：山本達男 新潟大学医学部細菌学教室

問合せ先：事務担当 種池郁恵、Tel 025-227-2050（直通）、Fax 025-227-0762、

E-mail: tane@med.niigata-u.ac.jp

海外会員便り

神奈川歯科大学・口腔細菌学教室 渡辺清子

私が、ワシントン大学・歯学部Dr. Lamont の元に来てから、早いもので一年が経とうとしています。アタフタと詰め込んだスーツケースと Power Book を抱えてシアトルのタコマ空港に降り立ったのが遠い昔のように思われます。空港へは、教授自らが出迎えに来て下さって、8月の中旬だというのに、教授宅の近くの小径では濃い青紫色の紫陽花が咲いていたのがとても印象的だったのを覚えています。

シアトルは Emerald City と言われる様に緑の多いとても美しい街で、日本の札幌程度の緯度ですが、冬でも温暖な気候なので雪は滅多に降らず非常に過ごしやすい所です。夏は特に素晴らしい、湿度が低い上に気温も30℃位までしか上がらないのでとても爽やかで、日本の猛暑とは比べ物になりません。ワシントン大学は、1861年にシアトル・ダウンタウンにオープンしたのですが、1889年にワシントン州が42番目の州として認められた事をきっかけに、現在のキャンパスに移動したものだそうです。移動当初は鬱蒼とした原始林であったキャンパスも、1909年のアラスカ・ユーコン博覧会の会場として貸し出された機会にすっかり整備され、次々とゴシック様式を取り入れた建物が建設されるようになりました。ですから、現在の大学は、春には桜で満開になる Upper Campus や中世に舞い戻ったかと思うような図書館、日本の富士山によく似た Mt. Rainier を真っ直ぐに望む位置にある噴水など、全米でも屈指の美しさを誇っています。

さて、ラボはと言うと、すでに多くの留学経験者はご存知だと思いますが、日本と大して差がないのが現状です。それどころか、細かなハード（設備）面について言えば、日本の方がはるかに贅沢であるとさえ言えるようです。日本では、どこぞの実習室の片隅に追いやられて廃棄処分を待っているような小型遠心機が、大手を振っ

てウィーン、ウィーンと活躍している姿には、呆れたとは言うものの正直言って頭が下がる思いでした。遠心機というと、「これぞ、アメリカ！」と言えるような事が有りました。冷却式高速遠心機のスイッチが常にONになっているのです。遠心する度に外気温との差で蓄積していった氷が、遂には遠心軸を腐らせてしまったようで、メンテナンス時に軸を交換していたのには驚きです。さすがに皆困惑したようで、それ以降は庫内を乾燥させるようになりましたが……。又、以前、論文で見かけた KLETT-SUMMERSON なる光度計を使って濁度を計り、細菌数を計算した時には、「これが、カノ…」と妙に感激したものです。

何はともあれ、Lamont Lab は国際色豊かなラボな上、女性研究員が多いので、そして大きなカルチャーショックや孤立感などは感じる事なく一年を過ごすことが出来ました。又、情報社会の昨今、コンピュータが有れば日本のラボや友人達とも気軽に連絡が取れるので、不便さを感じる事ありませんでした。やりたい事を率直に話し合い、納得して貰えれば「No」と言う返事が返ってこない環境は、今や心地の良いものになりつつあります。大学に向かうバスの中からふと外を眺めると、今年も濃い青紫色の紫陽花が大きな花を咲かせていました。



日本細菌学会関東支部・平成13年～15年期評議員選挙の報告

関東支部選挙管理委員会 (○委員長)

安部 茂、今西健一、小原康治、○川原一芳、平松啓一

平成13年～15年期評議員選挙は支部ニュース第35号でお知らせした日程に従い行われ、平成12年5月20日に開票が行われた結果、14名の評議員の当選が決まりました。今回の選挙は平成9年10月30日に改訂された新しい選挙細則に基づいて行われました。有権者数は1,009名、投票率は27.6%でした。選挙結果については本支部ニュースに掲載の第9回評議員会議事録をご参照下さい。選挙に際しての会員の皆様のご協力に感謝いたします。

平成13年～15年期支部評議員・幹事紹介

[評議員]



安部 茂
帝京大学・医真菌研究センター、助教授
医真菌学、特に真菌感染に対する生体防御と化学療法



今西 健一
東京女子医科大学・微生物学免疫学教室、助教授
T細胞の成熟・分化・活性化の解析、スーパー抗原に係わる細菌感染の解析

本人のご希望により写真は省略いたします。

池 康 嘉
群馬大学医学部微生物学教室、教授



大野 尚 仁
東京薬科大学・薬学部第一微生物学教室、助教授
細菌・真菌表層成分の構造と免疫修飾作用に関する研究



伊 藤 輝 代
順天堂大学・医学部細菌学教室、講師
ブドウ球菌の病原性と薬剤耐性に関する分子生物学及び分子疫学



奥 田 研 爾
横浜市立大学・医学部細菌学教室、教授
微生物に対するワクチンの開発、記憶学習の分子生物学



小原 康 治
東京理科大学・薬学
部微生物薬品化学研
究室、教授
薬剤耐性菌の新しい
耐性化機構の分子生
物学的解析



小 出 幸 夫
浜松医科大学・微生
物学教室、教授
感染免疫学、細胞内
寄生菌感染DNAワ
クチンの研究



大 谷 剛
第一製薬株式会社・
創薬第一研究所、主
任研究員
抗菌化学療法および
生体防御機構



笹 原 武 志
北里大学・医学部微
生物学教室、講師
腸管系病原細菌の病
原性と感染予防に関
する研究



加 藤 哲 男
東京歯科大学・微生
物学講座、助教授
歯周病原細菌の病原
性因子とそれらに対
する免疫応答の解析



清 水 徹
筑波大学・基礎医学
系微生物学教室、助
教授
病原細菌における毒
素産生調節の分子生
物学的研究



神 谷 茂
杏林大学・医学部感
染症学、教授
ヘリコバクター・ピ
ロリの病原因子の解
析、腸内フローラと
生体機能



戸 邊 亨
東京大学医科学研究
所・感染免疫大部門
細菌感染分野、講師
腸管系病原細菌の病
原性発現に関わる細
菌ならびに宿主側因
子の解析



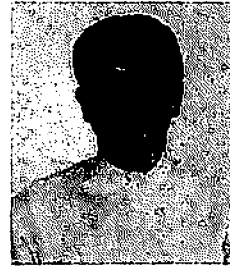
切 替 照 雄
国立国際医療センター
研究所・感染・熱帯
病研究部、部長
国際的感染症



平 井 義 一
自治医科大学・微生
物学教室、教授
臨床細菌学、特にヘ
リコバクターに関す
る研究



辨野 義己
理化学研究所・微生物系統保存施設、室長
微生物分類学、微生物生態学



山田 澄夫
東京都立衛生研究所・多摩支所微生物研究科、科長
腸管感染症に関する疫学および起因菌の病原性に関する研究



松井 英則
社団法人北里研究所・基礎研究所感染免疫研究室、室長補佐
サルモネラの病原性遺伝子の解析



渡辺 治雄
国立感染症研究所・細菌部、部長
病原細菌の病原性の分子生物学的研究および分子疫学的研究



山口 恵三
東邦大学・医学部微生物学講座、教授
臨床微生物学、感染症と治療



加藤 秀人
東京女子医科大学・微生物学免疫学教室、助手
分子免疫学

[幹事]

平成9～12年 第9回 日本細菌学会関東支部評議員会 議事録

日時：2000年7月16日午後1時30分～3時

場所：東京女子医大中央校舎4階講義室

出席者：安部茂、今西健一、内山竹彦(支部長)、奥田研爾、小原康治、大國寿士、加藤哲男、川原一芳、笹川千尋、笹原武志、田中重則、平松啓一、松浦基博、丸山務、宿前利郎、山田澄夫、加藤秀人(幹事)

欠席者：梅本俊夫、佐竹幸子、益田昭吾、森田耕司、山口恵三、渡辺治雄

1 次期評議員選挙の結果の報告

川原一芳選挙管理委員長から次期評議員の選挙についての経過報告が行われ、続いて内山支部長より、次期評議員の選挙の結果の報告がなされた。選出された評議員は安部茂(帝京大医真菌研究センター)、伊藤輝代(順天堂大医学部細菌学教室)、今西健一(東京女子医大微生物学免疫学教室)、奥田研爾

(横浜市大医学部細菌学教室)、小原康治(千葉大薬学部微生物薬品化学研究室)、加藤哲男(東京歯科大微生物学教室)、神谷茂(杏林大医学部感染症講座)、小出幸夫(浜松医大微生物学教室)、笹原武志(北里大医学部微生物学教室)、辨野義己(理化学研究所生物基盤研究部微生物分類室)、松井英則(北里研究所感染免疫研究室)、山口恵三(東邦大医学部微生物学教室)、山田澄夫(都立衛生研究所微生物(多摩支所))、渡辺治雄(国立感染症研究所細菌部)の14名(アイウエオ順)。また、内山支部長より本評議員会の直前に開かれた次期評議員の集会において内山竹彦現支部長が次期関東支部長に再選されたことが報告された。

2 第83回関東支部総会の準備状況

渡辺治雄総会長から、総会(12年11月20、21日)準備状況の説明が書面でなされ、内山支部長によりその要点の説明がなされた。特別講演1、教育講演1、ワークショップ(ミニシンポジウム)4～5部門、一般演題の構

成である（演題締切は9月18日）。なお、詳細は日本細菌学雑誌第55巻第2号（2000年）及び日本細菌学会ホームページ（<http://www.soc.nacsis.ac.jp/jsb/guide.html>）に記載されている。

3 第84回関東支部総会の準備状況

奥田研爾総会長から、平成13年11月後半に横浜市において開催する予定であるとの報告があった。

4 各種委員会報告

編集委員会：川原委員長から、9月発行予定の支部ニュースの編集が進行中であるとの報告がなされた。学術委員会：宿前利郎委員長より、第85回関東支部総会（平成14年秋）の総会長候補者の選出が進行中であるとの報告がなされた。将来計画委員会：平松啓一委員長より、活動経過について報告がなされた。合同学会委員会：大國寿士委員長より、活動経過について報告がなされた。

（本議事録は平成12年8月30日に評議員回覧により承認されました。）

平成12～15年 日本細菌学会関東支部 新評議員会 議事録

日 時：2000年7月16日午後1時～1時30分

場 所：東京女子医大中央校舎4階講義室

出席者：安部茂、伊藤輝代、今西健一、
奥田研爾、小原康治、加藤哲男、
小出幸夫、笹原武志、松井英則、
山田澄夫、内山竹彦（旧支部長）、
加藤秀人（旧幹事）

欠席者：神谷茂、辨野義己、山口恵三、
渡辺治雄

1 新支部長の選出についての審議

新支部長の選出について、7月7日付けの郵送による次期評議員各位への連絡に記したように、1) 本日即日選出、2) 候補者を選出して、後日郵送による投票による選出、の2案について審議し、第1の案が採択され、即日選出となった。

2 日本細菌学会関東支部会則（第82回日本細菌学会関東支部総会講演抄録集に掲載）の確認後、内山竹彦氏が推薦された。支部長の再任については会則及び細則上問題はなく、もし選出された際、再任は可能であることが確認された。推薦された内山竹彦氏を含めて任意に投票する方式で、出席次期評議員10名により単記無記名で投票がなされた結果、内山竹彦氏への投票が8票、他2票であり、次

期支部長として内山竹彦氏が選出された。

（本議事録は平成12年8月30日に新評議員回覧により承認されました。）

〈受賞のお知らせ〉

本年5月に行われた第73回日本細菌学会総会において、関東支部会員の中から下記の受賞がありましたので、お知らせいたします。おめでとうございます。

平成11年度黒屋奨学賞受賞

石原和幸 東京歯科大学

「*Treponema denticola* 表層成分の病原性の解析」

【編集後記】

本号（第36号）に新評議員と支部長の紹介を組み込んだ形で編集し、今期の編集委員会の活動を終了いたしました。長いと思っていた3年間の任期も、終わってみればあっという間の出来事でした。支部ニュースをより多くの会員に、より興味を持って読んでもらおうと意気込んで編集を行って参りましたが、必ずしも思い通りには行かず、やり残したことも多いように感じます。幸い次期評議員会ですでに編集委員会が組織されたようですから、次号からは新しいセンスによる興味深い紙面が展開すると思われれます。どうかご期待下さい。支部ニュース編集のために貴重な原稿や資料を頂いた多くの先生方、および支部ニュースを読んでいただいた全会員の皆様のご協力に心より感謝いたします。（編集委員一同）

日本細菌学会 関東支部ニュース 第36号

(2000. 9. 30)

発行：日本細菌学会関東支部
〒162 東京都新宿区河田町8-1
-8666 東京女子医科大学

微生物学免疫学教室内

支部長 内山竹彦

編集責任者 川原一芳

Tel 03-3353-8111 (内線22713)

Fax 03-5269-7411

E-mail: tuchi@research.twmu.ac.jp
